

# 司馬遼太郎論「再論」

細野 哲弘

一般財団法人 日本特許情報機構 理事長  
(元特許庁長官 前JOGMEC理事長)

以前の本誌に、司馬遼太郎の評論稿を載せて頂いたことがある<sup>1)</sup>。色々な意味で、沢山の反応を頂いた。「なるほど、お前の言うことも分からないではない。」という反応もあったが、むしろ、「お前ごときが論じるのは10年早い。」という趣旨のモノの方が多かったように記憶している。でも当時は、「10年早いのはそうかもしれないが、それほどピントがズレてはいないのではないか。これも評価の一つのアングルだろう。」くらいに思っていた。

しかし、今年は彼の生誕100周年でもあり、改めて彼の書いた評論（「坂の上の雲」の各巻のあとがきを含む。）、講演録などに当たるうち、「前回は頑張っ、目一杯書きすぎたかな。それで、却って分かりにくくなったのかもしれない。」と思うようになった。本稿は、そんな思いから「視点を絞って再論を試みん」とするものである。

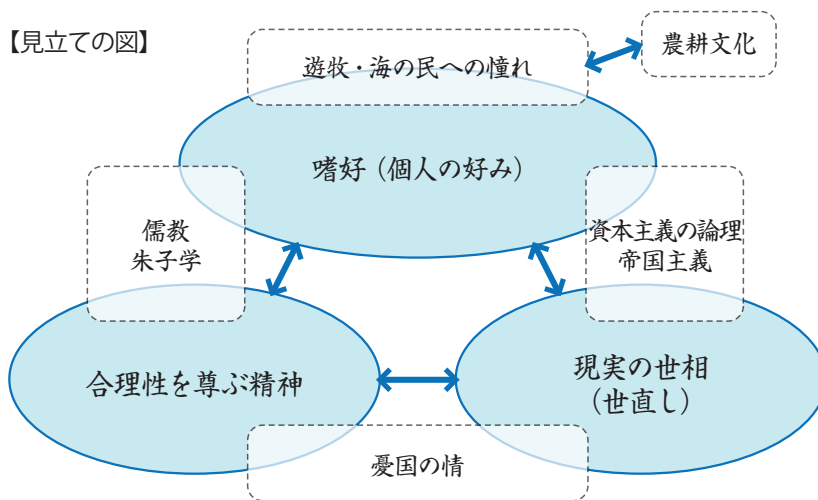
「目一杯書き過ぎた」と感じる所以は、偏に膨大偉大な彼の業績に対し、浅学非才のくせに「無理に背伸びして、各作品の執筆された時代背景などにお

構いなしに、彼の全体像を鳥瞰的にカバーしようとした」ということにある。

前回の試論で用いた「見立て図」とは、下記のモノである。色々な要素を一覧的に表すべく、四苦八苦して作ったものであり、当時はそれなりのモノだと思っていた。しかし、改めて眺めてみて気づいたのであるが、この図には「収斂するポイントがない」ことが致命的である。要するに、「司馬さん、あなたは何が言いたいのか。結局のところ、どうなんだ?!」と問いかけていながら、落ち着くべき結論が出てこないのである。だから、筆を進めるほどに、評論としては「フッと視線を泳がせて」不定見な感慨に逃れるしかなかったのである。これでは、書いている方も、読んでいる方も納得感に欠けるはずである。

その反省(?)に立って、此处では次の2点に絞って再考してみたい。

①彼は、「穂の実る国・日本を代表する国民的作家」



前回の見立て図（本誌282号より再掲）

1) 「みずほの国の司馬遼太郎（2016年5月本誌第282号）」参照。

なのに、「豊蘆原瑞穂国」に基本的共感がないように思えるのは何故なのか？

②彼の作品に投影される「光と翳」は、どちらに彼の本旨があるのだろうか？

この筋立てを追うことで、結果として前稿の「腑に落ちなさ」が晴れるかどうかは心許ないが、とにかく遣ってみたい。

司馬の作品の小説なるものが、小説なのか、歴史論（史書）なのかを論ずることは難しい。彼自身も代表作の「坂の上の雲」について、「小説でも史伝でもなく、単なる書き物である（「歴史の中の日本」より）」としている。また、膨大な事実関係を踏んまえた上で、「千数百年、異質の文化体系のなかにいた日本人と云う一つの民族が、それを棄てて、産業革命後のヨーロッパの文明体系へ転換したという世界史上もっとも劇的な運命をみずから選んだのだが、そういう劇的なことというのは、小説と云う世界にひきづりこむことはじつに難しい。双方、本来、質としては無縁かもしれない。（「坂の上の雲 四巻あとがき」より）」などと書いている。正統な文学界、歴史学会の両方から異端視されるのも宜なる哉である。

彼の小説にみる特徴の一つに、「余談なるが」と言っては急にストーリーと直結しない「注記」が入ることがある。他の小説家にはない手法である。ストーリー展開には直結しないから、下手をすると「話が折れてしまう」可能性があるのだが、人物に焦点を当てることの多い物語では「読者が登場人物に感情移入をしすぎない」ことに役に立つ効果がある。彼の手法は時に主題がバラけそうになりつつも、「余談」なるものが登場人物の思考と微妙に絡み合い、展開に厚みを増すことに寄与している。好きな向きには堪らない不思議な魅力を醸し出している。しかも、それに留まらず、そうした注記を通して、時々世相の政治、社会、軍事現象に読者の関心を誘導し、就中昭和の歴史、特に太平洋戦争に至る歴史プロセスに疑問を投げ掛けるという評論的効果を実現している。ある意味においては、余談の方が「言いたいことなんだな」と思うような場合さえある。もっと言えば、「歴史描写を借りた現代評論」になっている。

歴史というジャンルは、少なくとも学問的に追究するのでなければ、素人にも「取っつき易い」。抽象的で理論の筋が問われる哲学や思想の分野は敷居が高くとも、素人なりに古戦場や史跡などの現地に行くなり、人物系譜を辿るなりして、「私はこう思う」と言うのは、常に「あり」なのである。「思ったが勝ち」で、理屈ではなく「思う、感じる、想像する」のは自由である。筆者の歴史へのスタンスも基本的にそうしたものである。誠に烏滸がましい比喻になったが、司馬の余談はそれを緻密かつ巧妙に遣っている感じがする。

司馬は1987年の「鞭鞭疾風録」を最後に小説を離れ、評論、紀行文、文明論の執筆が多くなる。筆者には、小説の展開のなかで「余談」という形で遣っていた評論を、以降は小説と云う形を経ないで直接遣っているように思える

前稿の試論で、筆者の読書遍歴、歴史傾斜に影響の大きかったものとして、吉川英治の「三国志」や始まったばかりの頃の大河ドラマを挙げた。うち同ドラマの原作になった他の著名な歴史小説家、例えば海音寺潮五郎（天と地と）、山本周五郎（樅ノ木は残った）、大佛次郎（赤穂浪士）などの作品は、主人公の克苦立志談、英雄譚が中心である。登場人物の史的背景を斟酌し比較論的に現代の課題を投影的に提起するような構えにはなっていない。また、山岡壮八の「徳川家康」は戦後経済を支えた企業経営陣に大層受けて、一世を風靡したのだが、それでもこれらは「歴史小説」であり、司馬の評論的史書とは違う。

前振りが長くなったが、これらの執筆傾向を念頭に置くと以下の話が少しは分かりやすくなると思うからである。

その上で、愈々最初の視点、大地の恵み—農作物を大事にし、それが吾が文化の礎である筈の「豊葦原の瑞穂」に係わる問題に取り掛かりたい。

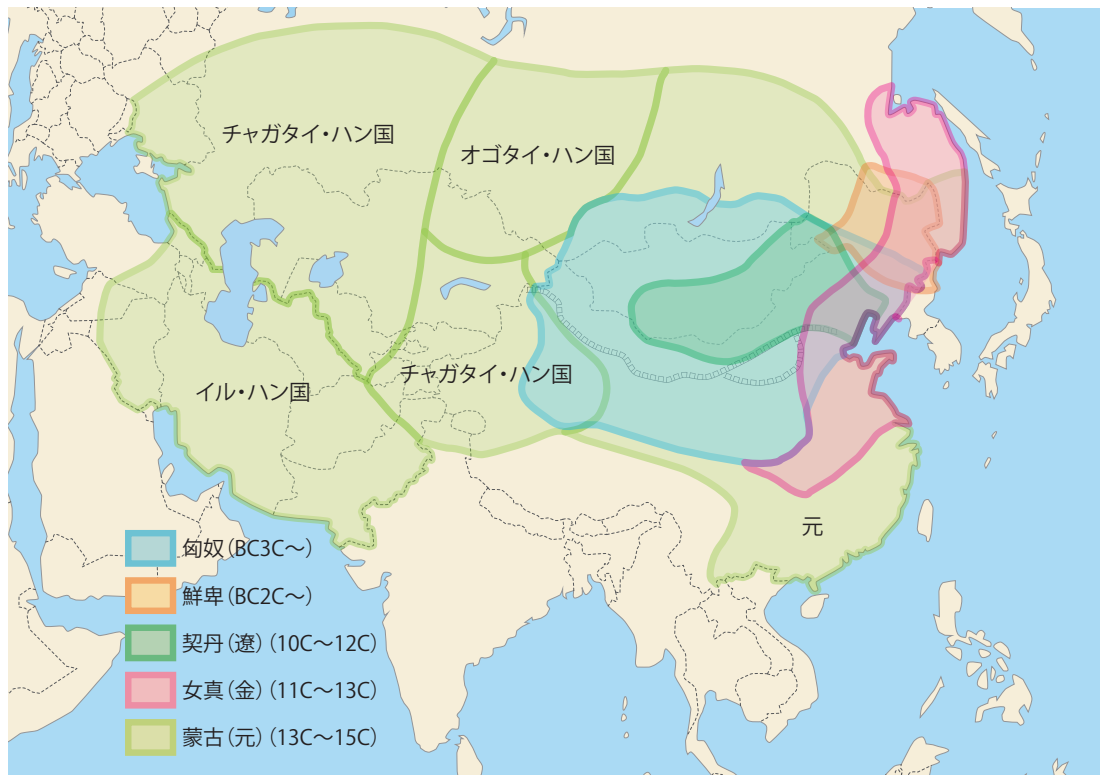
「風に吹かれて漂流する」というのは司馬の基調であり、彼を解釈する上でのキーワードである。自由に束縛されずに気儘に行動すること、そしてそのようにする民が好きである。人の嗜好に理由はないだろうが、旧制高校の受験に二度失敗しやむなく官立の大阪外語大学に入学したことが影響しているとの説がある。外語大も立派な学校なのだが、彼自身

にとっては挫折であって、故に既往の正統的なるものから距離を置くような姿勢をとる根元となったとの趣旨である。しかし、ちょっと穿ち過ぎではなからうか。むしろ、外語大で、彼をして敢えてモンゴル語を専攻させたような元々の彼の性向の方が決定的なのではなからうか。モンゴルの草原を自由に疾走する騎馬民族は彼の憧れであった。

司馬は、匈奴、鮮卑、突厥、蒙古、女真、朝鮮、日本、はてはハンガリー、トルコなどは「ウラル、アルタイ語族<sup>2)</sup>」であって、もとは民族も習俗も繋がっていると論説を、あちらこちらで展開する。とりわけ蒙古、満州の一体性、遊牧、馬の文化に着目する。

「乾燥した草原<sup>ステップ</sup>から、湿潤な農耕地の山河を見ると、景色がかえっておもしろく、ときに気味わるく、ときに農業王朝そのものが奇習と奇行の連鎖のように見えてくる（「歴史の夜咄」より）」と云うとき、この「農業王朝」というのは中国の漢王朝のことである。ポイントは上記の地域は中国とは一緒ではないという

ことと、農業の営みを「奇習」、「奇行」とみなしていることである。これは、遊牧の民から観た視点であり、農業やそれを担う民族に向ける眼差しに好意がないのは明らかである。むしろ「奇」でないのは遊牧の方であって、司馬自身がそれに同調している点が肝腎。「少年の頃、日本に住みたくなかった」とまで吐露する心情は、理屈以前の嗜好、性向そのものであろう。騎馬民族には姓もなく、決まった棲家もなく、馬と一緒に草を求めて漂う。それが若き日からの司馬の理想とする自由という名の生き方であった。だから、土地に縛られ、定住して視野狭窄的に毎年同じ農作物を作り続けること、そしてそれを是とする文化が嫌いであった。司馬の騎馬民族への憧憬は「我が民族も騎馬民族の末裔だったらいいのに」という想いにまで発酵し、「私は前から、坂東武者の祖先は、歴史的に騎馬民族から影響を受けた筈の朝鮮の地からの渡来人で、奈良時代に朝廷から送り込まれて帰化した人々である（！）」という説をとってきた（「歴史の中の日本」より編集）」とまで言わしめている。



騎馬遊牧民族の地域と時代

(作図は筆者の主観による。民族名は時代により変遷しており、例えば、女真族は、元に敗れて一旦消滅するが、のちに清を建国し中国全土を制圧。17世紀以降は満州族という呼び名が普通となった)

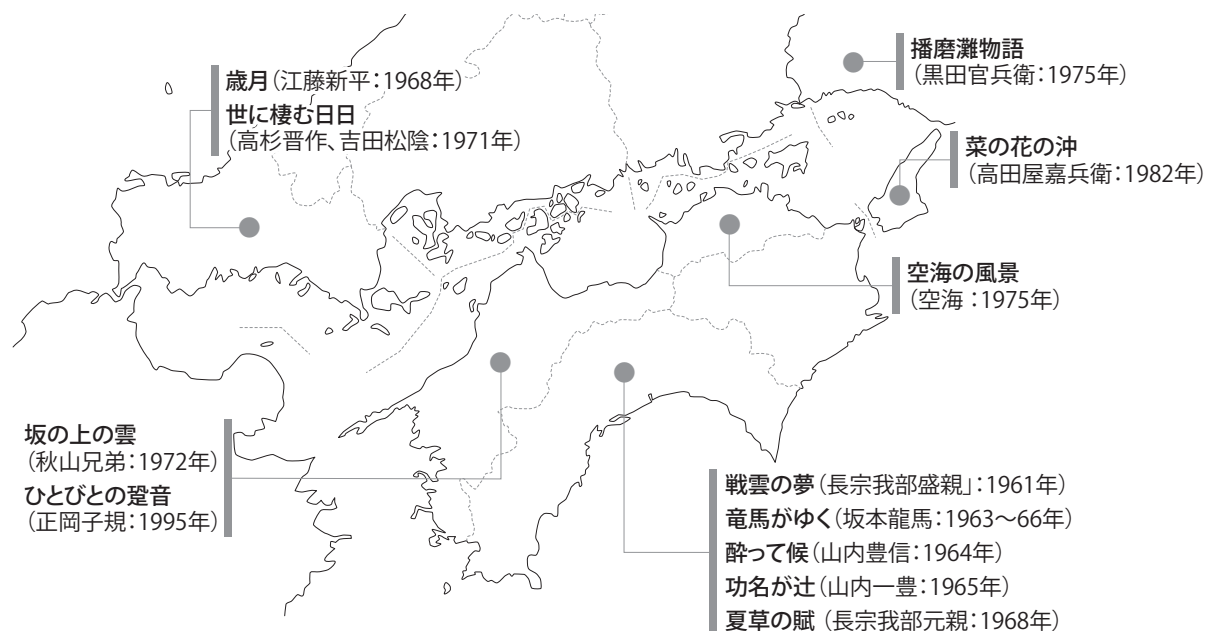
2) ウラル、アルタイ語族というのは、最近の学説では各々別の語族と整理されている。ウラルはウラル。アルタイはアルタイである。当然のことながら、キプチャク汗国は双方のブリッジにはなっていない。

同様に、自由を志向し、一ヶ所に留まらない行動を好む視線は、海の民の生き方、発想にも向けられた。船でどこ迄も行く。行きたいところに行き、モノを運ぶ。魚を獲る。交易する。利を説いて利潤の循環を紡いでいく。そこは、合理性と才覚の勝負の世界<sup>3)</sup>であり、<sup>さいえき</sup>遮るモノはない。龍馬に先入主観、つまり過去を引き摺る「常識」はなかった。

司馬には、瀬戸内海、四国地方を題材にした作品が多い<sup>4)</sup>。「夏草の賦」、「戦雲の夢」の長宗我部元親、盛親父子、「竜馬がゆく」の坂本龍馬、「菜の花の沖」の高田屋嘉兵衛、「空海の風景」の空海、「坂の上の雲」の秋山真之など、いずれも既存の発想、スキームや宗派を乗り越え、己一人の才覚で運命を開いていく群像である。とりわけ四国山脈に隔て

られ、太平洋の黒潮に洗われて独特の世界観を育んだ土佐の風土と人々に格別の眼を注ぐ。彼らの「雄飛」を支えたのは、海であり、海洋の大きさ、自由であった。司馬は、耕作地に縛られて「いじましく」生きる農民の対極のものをそこに見ている。海の男・坂本龍馬<sup>5)</sup>、内海淡路島発なるも菜の花の油を船で遠く日本海にまで商う高田屋嘉兵衛などの姿がその典型である。讃岐出身の空海は随分他とは趣が異なるが、やはり「底抜けに明るい」し、<sup>こだわ</sup>拘りが無い。

与えられた枠の中でそれに合うように自らの行動や発想を律していくより、その枠を飛び越えて新しい枠を作っていく生き方に強い共感を示している。自由に満ちた草原や海洋の空気然り、商業活動然り。



### 瀬戸内海地域にゆかりの司馬小説

(作品選択は筆者の主観による。また、「街道をゆく」シリーズは省いた)

- 3) 合理性を好む彼の嗜好は、医療、近代兵制などの分野の業績も好ましく描く。「胡蝶の夢」の松本良順、「花神」の大村益次郎(村田蔵六)などがその代表。
- 4) 「四国もの」にも色々ある。「功名が辻」は、もともと東海に発して夫婦協力して出世の階段を登っていった山内夫妻の話だから、他の「四国もの」とは毛色が異なる。じゃあ、「播磨灘物語」はどうだ、瀬戸内だぞといわれると、ちょっと困る。黒田官兵衛の話で、確かに才覚と気配りの人で先見えも素晴らしいが、軍師としての制約もあるし、その割には妙に色気がありすぎるのが、他の群像とは味が違う気がする。  
一方、空海はというと、宗教人で他とは趣を異にするが、彼の漢句にみるように、「玉藻(たまも) 帰(よ)る所の島檣樟(くすのき) 日を蔽(かく)すの浦に住めり」と、スカッと屈託がない。のちに密教という宇宙原理の新境地をしたたかに我が国に齋(もたら)した片鱗がうかがえる。「玉藻帰る」は讃岐の枕詞である。
- 5) 坂本龍馬という名前がメジャーになるのに、司馬の「竜馬がゆく」が大変な貢献をしたのは事実であろうが、それ迄は無名に近かったとするのは正確ではない。かの日本海海戦前夜に、バルチック艦隊がどのコースで旅順港を目指すかが朝野をあげた重大関心事項であった。その時期に、明治帝の皇后陛下の夢枕に二度に亘り白装束の龍馬が現れ、「ご心配には及びません」と述べたという。これは、宮内庁経由で報道もされ、皇后陛下も含めて彼のことに知識のない人々の間でセンセーションを巻き起こし、彼の名が一躍有名になったことがある。当時宮内庁にいた土佐人幹部が意図的に仕組んだとの説があるが、筆者にすれば、その真否より、話題がバルチック艦隊で、龍馬と併せ共々司馬小説の有力素材になったことの方に巡り合わせを感じる。

前稿で、これを彼の「ロマン」と記述したが、司馬自身は、しかしこれが「ロマンのままには終わらない」ことは自覚していた。

騎馬民族が気儘に放浪し、自らに足りないもの（食料、道具、ときに女性）を、行き当たった土地の農耕民族から掠めとるのは、掠めとられる当事者はともかく、そうした騎馬民族襲撃の数と頻度に限りがあればマクロ的には「受忍」の範囲かもしれない。しかし、収奪が実を挙げるにつれ、これが頻繁に及び、規模が大きくなると「ロマンのための些細な摩擦的弊害」に留まらなくなる。常に収奪される側の農耕民族は堪ったものではないのである。

その典型が13世紀以降のモンゴル帝国の歴史である。チンギス汗の孫であるバトゥ大汗はロシアの地に大挙して押し寄せ、地域の富を収奪した。しかも一過性で去らず、キプチャク汗国を打ち立て、実に260年に亘って居座り、空前の大搾取（「タタールの軛」と怨みを込めて称された）を続けたのである。

ちょっと横路に逸れるが、筆者は前職でロシアのウクライナ侵攻で随分苦い経験をさせられた。当初、何がロシアを、或いはプーチンをこれほど迄の蛮行に駆り立てたのかが不可解であった。古くはキエフ公国時代からの経緯など調べる中で、「ウクライナに起源をもちロシア陸軍の代名詞みたいになったコサックはもともと遊牧民であり、自らの安全には見渡す限りの区域だけでは足りず、そのまた外縁をも安全圏に組み入れることを必要とした」とする説明に興味を引かれた。民族特性として、ロシアは直接国境を接する隣国が自らの陣営でない気持ち収まらないとする解説であった。勿論、だからと言って隣国の運命まで勝手に制約することが正統化されるものではなく、プーチンの行為を肯定できるわけではないにしろ、一定の納得感を与えるものではあった。

一方、そうは言ってもロシア民族は騎馬民族ではなく農耕民族の筈なので、違和感があるなあと感じていた。ただ、「タタールの軛」が、長きに亘る騎馬民族からの農耕民族へのトラウマを惹起し、それが農耕民族たるロシア人をして「外敵を異常に怖れ、外国を病的に猜疑して、見渡す限りでは安心できない。その外にも安全ゾーンを必要とする」と思わせるようになったとすれば、是非の問題ではなく、背景説明としては一理あるように思える。ウクライナ

侵攻が蛮行であるとの評価は覆らないし、中欧、北  
 欧諸国の自律的セキュリティをも尊重する必要があるにせよ、あくまでも私的な感想であるが、僅か250年の歴史しかない米国に主導されるNATOのこれまでの行動が、こうしたロシアのセンチメントを踏まえた上のものであったかどうかは議論があろう。

話を戻したい。

合理性と自由に満ちた草原の騎馬民族の活動や海洋での行動や商業活動も、それが合目的に成功すればするほど資本主義の論理が動きだし、暴力化する。一部の者しか利益の恩典に預かれず、殺伐とした格差が蔓延る。

草原の騎馬民族の行動にせよ、海の商業活動にせよ、システムとして自己増殖を果たすと、矛盾をきたし、合理主義の罨とも云える自由の剥奪に直面する。このモデルをロマンとする道は「ふんづまり、行き止まる宿命」から逃れられない。その意味で彼のロマンは「悲しいロマン」である。だからこそ、そのことを予感できる司馬は、それでもギリギリの「落とし処」を模索する。

彼は「モノにしがみついて黙々と維持する」ことが嫌いである。そのモノの代表が、土地であり、「ロマンを掲げ続けたい」彼が、槍玉に挙げるのが土地である。農業の営みを自由に欠けるとするのは、究極的には土地の束縛性に起因する。だから、この土地の属性がもたらす現象には厳しい眼を向ける。とりわけ、バブル期の土地転がしのような現象には我慢がならない。

土地も生産要素の重要な一つであり、理念的にも地代は古くから正統なものとされているし、希少性の評価により価格が高騰するのは市場経済の基本である筈である。しかし、彼には資本主義、金融資本主義の矛盾の象徴のように映る。さすがに資本主義自体の否定はしないものの、「より実経済に根差した筋肉質でよりマシな経済体制」にするため、土地取引の野放しを責め、一挙に「土地の公有論」を主張したりするに至っている。松下幸之助氏との対談でも、大上段から執拗に論争を吹っ掛けたりしている（「土地と日本人」より）。

彼は関西人なのに、京都の伝統や公家意匠にあま

り共感を示さず、また、商業の自由さ、才覚次第のありように親しむ割には、大阪人の「ボチボチでんな」と言って世渡りする狡さにも一定の距離を置いている風がある。その彼が意外にも嬉しそうに好意の目を向けるのが、関東に拠点を置いた徳川幕府の「江戸の封建仕様」である。何故ここで江戸時代の仕切りが出てくるのか？

彼がそこで好ましいものとして言及するのが、「為政者は年貢はとるが、土地は農民のもの」というスキームである。このことは前稿でも触れたので詳細は省くが、社会の上部構造が土地の所有者ではないという点が彼の琴線に絶妙に好ましく響いた。武士は將軍から大名、旗本、陪臣に至るまで、治世の為の税の徴収はするが、土地を自ら持つような「はしたない真似」はしない。大名に於いても一朝国替えともなれば、任国は勿論、城も屋敷も無条件に明け渡した。彼ら為政者は土地の上に乗っかっているだけの存在だった。彼は、そうした仕組みが「明治の版籍奉還、廢藩置県を上手くいかせた秘訣である」とまで評価している。

彼は、土地と切り離された江戸期の体制の在り方を、たまたま土地に限りがあり無限の土地所有を許さなかった我が風土の「隠れた美点」として賛美した。彼は、そこに「逃げ込む」ことによって辛うじて、騎馬民族、海の商船隊のロマンの矛盾を躲すことができたのかもしれない。

さて、彼の作品に表れる「明るさと暗さ」というもう一方の問題は、豊葦原の瑞穂への想いほど簡単ではない。

司馬が技術、合理性の兵種である戦車隊の小隊長として太平洋戦争の前線を経験<sup>6)</sup>したことは、彼の著述に決定的な影響を与えたとされている。ブリキのような装甲、貫通力に劣る砲塔、走行性に劣る足回りしかない「戦車なる鉄の箱」に生身の兵隊を閉じ込め、気合だけで性能に優る敵に対峙させる作戦のありように、絶望的な情けなさを感じている。現



筆者の司馬遼太郎コーナー（自宅書架より）

場だけでなく、軍の中核においても同じ病理が蔓延っている様に憤りをぶつけるような著述が沢山ある。

技術の遅れは精神力で補えるという酔狂な文化を押し付けて、機械力の不足を勇氣と血で克服させようとする思考を許す組織の病理と、それを美化する体制をことのほか問題視している。それは、不合理と無責任への不信であり、国家に対する大いなる失望の表現である。

司馬は、偉大な思想家であり、哲学的巨人であるともされながらも、彼には思索、哲学を心底好ましいと思っていない風がある。

「思想というのは、本来、大虚構である。」という思いとその弊害を認識していた。少なくとも、それを教養として振りかざす輩には、はっきりとした嫌悪がある。それは、有職故実や漢籍和歌に通じていた明智光秀や、門閥と成績で序列の決まる軍部組織にみる「思考の硬直化」と「他を見縊る」姿勢を非難する筆に現れる。

「教養として振りかざす」とは、抽象的或いは形而上的な思考や論理を権威化して「正義の体系」となし、反技術、非合理のスパイラルに陥り、どんどん現実から離れていくことである。その病理を、明

6) 司馬は、大学3年のとき、学徒の召集猶予令の解除により早期卒業となり、戦車第19連隊に入営している。彼はその後戦車第一連隊の小隊長として満州に赴任したのだが、そこで見たのは、ノモンハン事変で使われし連のBT戦車に歯が立たなかった九八式中戦車や、「最新式」なるも予算をケチって鋼板を使えなかったため鏝（やすり）をかけると条痕がでてしまう砲塔を積んだ三式中戦車であった。後日談だが、日本陸軍は四式中戦車、五式中戦車を試作ながら開発した。戦後駐留米軍の技術士官をして、「これが大量に戦線に出たら、勝敗は簡単ではなかった。」と言わしめたほどの性能を具備していた。要は、我が国には折角の技術を具現する総合力としての資金力、国力がなかった。それを欠いた国に総力戦は闘えなかった。問題は、その彼我の差を認めた上で冷静に処すことを講じる替わりに、集団催眠術にかかったかのように、生身の身体と気合を盾にして機械力に対抗せしめるような作戦を平然とするような戦争指揮であった。

るはずの「坂の上の雲」における日露戦争での乃木一伊地知の第三軍指揮に、既に観ている。クリミア戦争でのセバストーポリ要塞<sup>7)</sup>の攻略資料さえ研究せずに現地へ赴いた乃木將軍の不明とその登用経緯、海軍からの艦砲提供の献策を意味もなく退けた伊地知參謀長の権威主義、セクショナリズムに、のちの昭和軍部の病理を重ねている。そして、日露戦役のあと、科学的な内省なく過度の精神主義だけで、我が国を夜郎自大な民族に貶めていく萌芽を、そこに観ている。(「歴史の中の日本」より)

昭和前期の暗さ、特に敗戦を通じて「なんと馬鹿な国に生まれたか」と彼をして嘆じさせた軍部の絶望的なやるせなさを際立たせたかった。そのために彼は明治や幕末、更には戦国時代の澁刺とした「明るさ」を書いた。つまり比較の対象としての「明るさ」であり、主題は「暗さ」の方にある。歴史の「暗さ」に眼を向けさせ、今も有るかも知れない「暗さ」の意味と克服策を今の国民に考えて貰うために、「明るさ」を対比させているのではなからうか。

時代性への投影、メッセージという意味では、彼の作品が書かれた時期における作用関係も重要である。彼は、意図的に国民の眼を「暗さ」に向けさせはしたが、しかし「暗さ」の記述は飽くまでも「明るさ」への挑戦のジャンピングボードであった筈である。

司馬の作品が勇躍した昭和の50-60年代というのは、高度成長のピークを過ぎて、将にポスト「坂の上の雲」を見つけ出すことを求められた時期であった。そこでは、既成の概念や発想を超えて日本の新しい指針を模索することが叫ばれたのであり、戦国時代や維新の時代背景と通底するものがあつた。新しい価値や国家感を求めて既存の価値観を乗り越えていく松波新九郎(斎藤道三)、織田信長や坂本龍馬の澁刺とした発想、行動は、自律した企業戦略の

確立に邁進する経営層や企業人の励みになり、活力にもなったはずである<sup>8)</sup>。司馬の描く主人公に「果敢に変化に対応をしていく指導者」のイメージを見出だしたとしても不思議ではない。

高度成長期の我が国は、今から振り返ると活力に満ちた明るい時期のように見えるが、反面、個性より順応、自由より忠誠を組織内で求められる「没個性・個人画一化」の時代でもあつた。そうした時代背景にあつて自由闊達に生きる坂本龍馬や土方歳三などは企業戦士にとっても憧れであり、癒しともなつた。

更に、時代性と云うなら、所謂「戦後50年」に際して再燃した戦争責任の論争との関連での彼の評価にも付言しておきたい。彼が描いた戦国時代や幕末から明治前半までの「明るさ」と「郎らかな上昇機運」には、戦後知らぬ間に国民を覆っていた自虐的史観の対極として「古き良き時代の素直なナショナリズム」を思い起させた。これにより、国民に自信と誇りを喚起させたと評価する向きがある。20世紀末に、こうした評価が改めて出てきたことに格別の意義があろう。

勿論、批判もある。

彼の作品の主人公には、時代のリーダーになるような英雄男性が多く、中小、零細企業や農民、非正規労働者さては女性など弱者からの視点に欠けるといふ批判がある。彼には「梟の城」、「風神の門」などリーダー論とは無縁な作品もあるし、代表作にも争乱の犠牲になる農民、庶民に言及がないわけではないが、全体的にはその批判は的はずれではなからう。しかし、物語を際立たせるには、特定の視点が不可欠である。彼の作品が支持された要因が、現在の社会的背景に投影され今を生きる人々の意識をくすぐるような過去の描写、解説にあつたことは明らかである。各々の作品が考えうる全ての客体を全面

7) クリミア戦争(1854-55年)におけるセバストーポリ要塞というのは、ロシアの黒海艦隊の根拠地があつた処。ロシア陸軍は黒海艦隊の艦砲を要塞防衛に転用し、かつ水兵も陸にあげて要塞防衛に動員した。ために、英仏土の連合軍は攻略に手こずり、13万人の死傷者を出したが、漸くに補給の弱点を見だし、これを陥落させた。この攻防記録は各国の観戦武官により、各々の国にもたらされ重要な資料となつてきた。しかし、こうした記録を自ら見ることも他者に質すこともなく現地へ赴いた乃木一伊地知の第三軍首脳は、無策にもクリミア戦争前半の轍を踏み、白兵突撃を繰り返し、多くの同胞の命をあたたら犠牲にした。

8) ちょっと主題から逸れるが、龍馬は北辰一刀流剣士としても達人(ひとかど)であつた。武道家の内田樹は、龍馬のある種の動物的な洞察力、直感力は剣術修行によって形成されたはずだとしている。龍馬の資質を土佐が育んだ天性のものとし、イデオロギー嫌いの司馬にしてみると、異論があるテーマであろうが、間合いが命という点では、自然体の人たらし革命家の資質と剣の極意は近いのかもしれない。内田の云う「居るべきときに、居るべき場所に居て、なすべきことを直感出来る」ことが武道の極みだというのは、面白い。

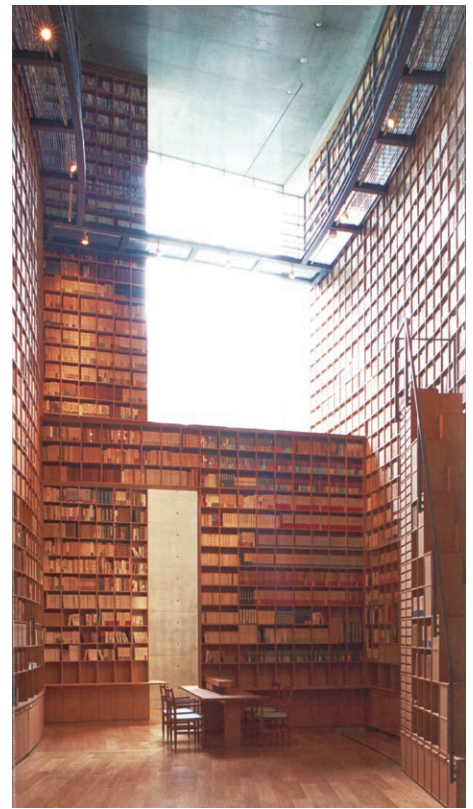
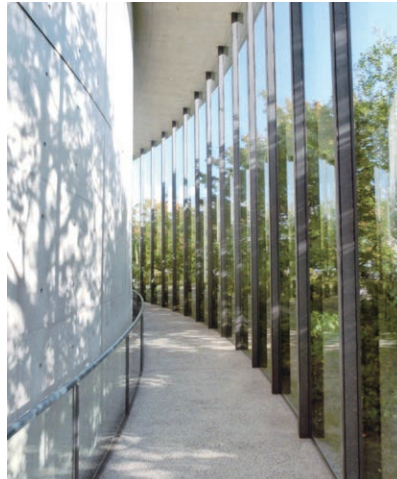
フォローしていないからといって作品の価値が貶められるものではない。日露戦争を描いた「坂の上の雲」がロシア側の被害者を描いていない、のちの日本の帝国主義的侵略性の可能性に焦点が当たっていないとの批判さえあるが、物語というのは、沢山の要素をフォローすれば良いというものではない。個々の小説の建て付けの問題である。

色々書いてきたが、我々はそのどこに何を見るべきか。戦国時代の信長や幕末の龍馬の革新の発想は、時代毎の特有の刺激と無縁とはいわないが、海外の追随、真似ではなかった。内在的で自由な発想と行動力の発揮であった。それができた民族に、未来に向かってそれができないはずはない。

彼は苦言を呈しながらも、「この国よ善くなれ。なれる筈だ」とする愛<sup>ナショナルリスト</sup>国者だっただと思う。時代の痛恨なる「翳」を浮き彫りにするために敢えて強調した「底抜けの明るさや逞しさ」は、仮にそう見えても時代の綾でしかなく、普遍的なユートピアなどないことは承知していた。それでも彼は、「明るさと逞しさ」を持てたことのある日本民族に「翳」を超越していく可能性を期待していたと思う。複雑化する世相であるが、むしろそうであるがゆえに、その可能性の発露を求めて止まなかった。

「日本民族にはええところあるんやで。しっかり前見て自分の地頭<sup>じあたま</sup>で考えて、ちゃんと生き抜けよ。」と呟<sup>つぶや</sup>きながら、各地の「街道をゆき」、「この国のより良いかたち」を、切なくも飽くことなく追い求めた求道者であったのではなからうか。

人は彼の<sup>たたず</sup>佇まいを「司馬史観」と言う。しかし、彼の人物や事象への視点は多様であり、時節の流れの中での光の当て方も一様ではない。だから、彼の<sup>スタイル</sup>佇まいをどう称するかよりも、歴史の流れに浮沈する世相や様々な人間像のどこに着目するかという読



司馬遼太郎記念館

(東大阪市 庭から司馬の往時の書斎が見える自宅の横に、個性的な弛(ゆる)いカーブの三角の形をした記念館がある。安藤忠雄氏の設計である。中世欧州の大学図書館のような内部には、とても個人の蔵書とは思えないような量の本が整然と積み上げられている。記念館内部に2万冊、自宅の書庫になお4万冊あるという。館内写真は記念館パンフレットより。)

み手側の佇まいと問題意識の方が大事である。答えは読み手の中にある。

歴史も人物も評価は100年経たないと定まらないと云われる。司馬の場合、生誕100年と云っても、没後まだ30年足らずである。司馬の作品が時代の写し鏡であるというなら、その評価も10年どころか、数十年早いと云われそうである。

でも、筆者はやはり司馬遼太郎が好きだし、ファンだとも思っている。しかし、大阪にある司馬遼太郎記念館には好んで行くが、菜の花忌に参加するほどではないのは、前稿のような感じを持っていたからである。

直接会ったり、講演を聴いたりしたこともなかったが、多分魅力的な話をする人だったんだろう、優しくて気配りの出来る大きな人だったんだろうとは想像できる。今回、再論を試みるに際して、改めて諸々の著作、講演録などに当たり、「やはり、実物に一度会って見たかったな」と思った。これが本稿の結びである。